

「沖縄の5月」は暑いそして熱い。例年ならすでに梅雨に入っているというが、私たちの行進を待っていたかのようにまだ始まっていない。

行進1日目、万座ビーチホテルでとても爽やかな朝を迎えた。東コースの出発地点にあたる「辺野古(へのこ)の浜辺」に着くころには、早くも温度は急上昇。綺麗な海。雲一つない空の青さにみごとに程溶け込んでいる。

当然のことだが、米軍基地との海域ラインはない。しかしながら、砂浜に目を向けるととすぐそこに「鉄線」で隔てられた境界線。その鉄線には、ここを訪れた多くの人々の「メッセージ」が白布にぎっしりと書きこめられ、砂浜を横切っている。海からの風が吹く度にそれらがなびく。その風音が「思い」を語っているように聞こえた。ジュゴンをはじめ多くの動物が生息する辺野古の海。自然を破壊し、地球上に生きるすべてのものを殺傷する新基地建設を断じて許してはならないとの思いを強くした。私たちは、沖縄市職の隊列の中に加わらせてもらって行進を出発。

旗が乱立する中で、兄弟組合からいただいた豊中市職の旗文字「反戦・平和」が一際目立っている。行進団の横を米軍車両がひっきりなしに走り去っていく。基地の島であることを歩き出すとすぐに思い知らされる。ずっと続く大行進。なのに前にも後ろにも警察官の姿がない。交通整理は行進団が担う。車も行進が去りゆくまでその指示に従っている。

学校の窓からは子どもたちが手を振る。仕事の手を止めて「がんばって」の声。気持ちが通じ合っていることを実感。

二日めは、嘉手納基地の周りをまる1日かけて歩く。豊中市の面積の半分以上の大きさを占める。この基地が返され、有効活用できたら沖縄は活性化し、失業で悩むこともない。多くの人が語っていたその意味を噛み締めながら歩いた。

最終日、3コースに参加していた全ての人々が宜野湾海浜公園に集った。「沖縄にいらないものは、本土のどこにもいない」。沖縄の代表が語っていた言葉が印象に残る。私たちがそれぞれの居場所でどう取り組むかを指し示していたように思えた。また、宜野湾市長は「基地のない平和な日本を実現する絶好の機会が衆議院選。自公候補に絶対投票せず、戦争反対を訴える政党と候補者に投票を」と力強くアピール。明確にものをいう市長。すごいと思った。

『沖縄を返せ』の大合唱がいつまでも続いた。老いも若きも沖縄は熱い。さあ豊中はどうか。